

待てど暮せど拝みの間より出で来たらざれば、こはいかなることぞと怪しみてござる。22 ところがやがて、出で来たりしザカリアを見るに、啞とはなりいてござる。されば人皆、これ畢竟ザカリアが尊き拝みの間に何かの不思議を目にしたるためなるべしと思ひてござる。ザカリアはただ手振り身振りをするばかりにて、口を開けどもただアッパアッパとするのみにて一向に言葉にはならぬのでござつた。

23 かくてお勤めを終え、ザカリアは家へ歸つてござる。

24 しばらくして、妻女エリサベツはめでたくも子を孕みてござる。エリサベツは五月の間家に籠り、申すには、

「25 「子がのうで、長い間世間さまに顔向けもならざりし」わたくしめの恥を雪いでやろうと、ありがたくも我らが御あるじなる神さまが御心におかけくだされて、かかる「嬉しき」ことを我が身になさつてくださりましたぞえ。」

三・イエシューさまが生まれるというお告げ

参照 マタイ 1 18、20、21

26 「エリサベツ孕みてより」六月目のこと、神さまから遣わされたるみ使いガブリエルが、「天離る」ガリラヤの地のナザレなる鄙里に住む、27 ダビデ王の血筋に連なるヨセフという人の許嫁にて、名を①マリウムといえる娘のもとにやつて来なされた。

28 ガブリエルのマリウムがおりし所に入り来て、言いなさるには、

「喜べ、喜べ！ 慈しまれたる者よ、我らが御あるじなる神さまはいつもそなたがそばにおいてなさるぞ。」

29 されど、マリウムはこの言葉に怖じ狼狽え、この挨拶はそも何故ならんとオロオロ思案に暮れてござる。

30 そこで、み使いの言いなさるには、

「そのように恐れおるをやめよ、マリウム。神さま

はそなたをことのほか愛しく思つておいでぢや。

31 見よ、そなたは孕みて、男のお子を生む。そのお子をイエシュと名づけよ。32 このお子はやがてこの上もなく偉きお方となり、いと高き御者の我が子と慈しみなされる尊きお方と唱えられる。御あるじなる神さまはこのお方にそなたらの先祖ダビデ王の高御座をお授けなさる。33 ①かくて、このお方はヤコブの家を代々にわたつて取り仕切り、その取り仕切りには終わりなからん。」

34 マリアムはみ使いに申し上げて、

「わたくしはまだ男の方と枕を交わしたこともござりませぬ。それなのに、なぜそのようなことになるのでござりまするか？」

35 み使いはこれに答えて言いなさつた。

「神さまの尊き御息がそなたにかかる。神さまのお力がそなたに包みかぶさる。それゆゑ、生まれて来るお子は尊いお子で、神さまの我が子と慈しみなされる尊いお方と言われるのぢや。36 見よ、そなたが親戚エリサベツも年寄りの身ながら男子を身ごもり、

生まず女と言われおりしが、今では既に孕みて六月目なり。37 神さまにおできにならぬことは何一つとしてあることなし。」

38 そこでマリアムは申し上げて、

「御覧なされませ、わたくしめは我らが御あるじなる神さまの召し使い女でござりまする。仰せのごとくいかようにもこの身をお使いくださりませ！」
それを聞くや、み使いはマリアムの前から姿を消してござる。

四・マリアム、エリサベツを訪ねる

39 かかることありたる頃のある日、マリアムは腰を上げ、急ぎ「隠国の」山の里なるユダの町へと旅立ち、40 ザカリヤの住むなる家へ入り、エリサベツが身に起こりしめでたきことを寿ぎて挨拶をば致してござる。41 マリアムの挨拶を聞くや、エリサベツが腹の中で子が喜びて踊り、エリサベツが心には神さまの忝なくも尊き御息が満ちあふれてござ

それからしばらくして後、ザカリアの妻であるエリサベツは身ごもりました。五か月の間、人前から離れたエリサベツは、こう歌いました。

「この私（わたくし）に　聖書の神は
この日々の間　ずっと変わらず
御目を注いでくださいました。
人々の間に　色濃くあつた
私の恥を　取り去られたのです。」

そして妊娠六か月目の時のことです。天使ガブリエルは、都に遣わされ、ガリラヤにある都市にやってきました。その都市の名はナザレといいました（皆さんの中には、ナザレは都市ではない、と、こ異論をお持ちの方も、おられましょう。でも、とにかく、私はそう聞いたのです。冒頭に「最初から・全て・詳しく・順序よく知っております」と申し上げた私としては、聞いたまま、そう申し上げる次第です）。ヨセフという結婚前のある女性のに、ガブリエルはやってきました。この女性は婚約中で、相手はヨセフといい、「ダビデの家系」の人でした。名家の生まれですが、今は没落して、家名だけを誇る一族でした。その名家のヨセフと婚約してい

た女性の名前はヤリアムと言いました（皆さんは「ヤリア」
という名前で覚えかもしれませんが、私はきちんとギリシ

ア語で記します。ヤリアム、でございます）。

ガブリエルは彼女の所に入り込みました（皆様、どうぞ、
ギリシアの由緒ある神話の情景を、ここで豊かに思い起こし
てくださいます）。そしてガブリエルは歌います。

「幸いあれ！恵みを受けた方。

聖書の神『主』は あなたと共におられます。」

この挨拶にびっくりしたヤリアムは、これはいったいどうし
たことかと、思いをめぐらせました。天使はヤリアムに言い
ました。

「恐れるな。ヤリアム。

あなたは神の 恵みを受けた。

神の御許（みもと）に あつたみ恵みを。

見よ、あなたは身ごもる。

そして息子を生まれ落とす。

その息子には イエスと名前を付けなさい。

その息子こそ 偉大な人に 育ち行く。
至高の方の 息子と呼ばれる。

聖書の神『主』は この息子のために
『ダビデの玉座』を用意する。

その父祖の 玉座を彼は 手に入れる。
父祖の土地・ヤコブの土地を

代々に統らす（しらす）は 彼である。
その統治はとこしえに 決して終わることはない―」

アリアムは天使に言いました。

「それはいい、どのように、

私の身の上（え）に 起こりましょう。

私はいまだ 男の人を 知らないのです。」

天使は答えて言いました。

「聖なる霊が あなたに臨む。

至高の力が あなたを包む。

それゆえにまだ

生れ出（で）るすも 聖なる存在。

神の子どもと 呼ばれるだろう。

実に見よ

あなたの親戚エリサベツを。

彼女も同じく 子を宿した。

年は取っていたのだけれど

今は六月（おつき）の身重の身。

その身は確かに 『石女（うますめ）』と

皆に呼ばれて 苦しんでいたのに。

神にできないことはない。」

イリアムは言いました。

「御覧なさい、

ここにゐるのは

主の婢（はしため）。

あなたが語った事柄が

この身の上に 確かにそのまま なりますように」

すると、天使は彼女を離れて行きました。

受胎告知

(ルカ福音書一章二六—二六節)

きょう、私たちは集会場として使用されている小屋^{ラッヂ}に集まった。まず私たちは、エルビスの母親ナターリアとミラグロースと一緒に料理してくれた、亀の肉と米と豆と一緒に食べた。

福音書をきょうは、私たちの教区のうちで最年少の少女のひとり、グローリアが読んでくれた。さてそれから私たちは、一句一句討論して行った。

天使はマリアの許へやって来て言った。「お目出とう、恩寵に満ちたあなた！ 主はあなたと共においでになります。神はあなたを、他の女たちより多く祝福なさいました」。

私はこの箇所が天使祝詞^{アγγελ・マリヤ}の起源であり、従来、天使の最初の言葉は、つねに挨拶として翻訳されて来たことを説明した。しかしごく最近、「私はあなたに挨拶します」というのは正しい翻訳ではなく、「私はあなたにお祝いの言葉を申し述べます」と言わなければならないことが発見された。預言者たちはしばしば、この民から救世主^{メシヤ}が生まれることになるという理由で、イスラエルの民を意味する

《シオンの娘》にこのような祝福の言葉を述べている。

トマス・ペーニア老人が言った。——天使は、救世主の出産を目前にひかえたマリアに祝いの言葉を言い、そうすることによって同時に儂^{わし}らみんなを祝福して下さった。どうしてかという、救世主が金持たちのところではなくって、儂^{わし}らみたいな貧乏人のところに生まれておいでなさるというのが、その理由でさ。

フェリクス 解放者は、この民衆から生まれなければならなかったんだ。

ドン・フェリオ 彼は圧迫されている人々を解放したいと思ったから、そういう人間のひとりでなければならなかったんだ。彼が裕福な人間たちを解放するために来たのだったら、裕福な人々のところに生まれていただろう。

パブロ 金持は解放される必要なんかない。それが必要なのは、貧乏人たちだ。搾取する者たちが解放されるなんてことがあるもんか！

オスカー だけど、金持たちは彼らの搾取から解放されるべきなんだよ！

オリヴィア 貧乏人もお金持も、両方とも解放されるべきなんだわ。私たち、貧しい者たちはお金持から解放されるべきだし、お金持はお金持で自分たち自身から、つまり自分たちの富から解放されるべきなのよ。あの人たちは、私たち以上に奴隷なんですもの。

マリアは天使が語りかけたことに驚き、これは何の挨拶だろうか？ と思い巡らした。すると天

使は「おそれるな、マリヤよ。あなたは神のもとで恩寵を得たのです」と言った。

トマス・ペーニアが言った。——マリヤさまはきつと驚きなされたことだろうて。だってマリヤさまは貧乏で、本当に慎ましい娘さんでいらっしやっただから。自分がそんな大したものになられるってお聞きになったら、そりゃあマリヤさまは驚かれたことでしょうな。

若いアレフアンドロ。——だけど、そんなことを恐れることは何もないんだ。重大な人間になるってことに、もしかすると僕たちだって恐怖を感じるかも知れない。だけど、僕たちだって、僕たち自身何人かの人間だって、もしかしたら、他の人間を解放するために……そのリーダーになるっていう重大な使命を……そのう、この共同体内部か、あるいはソレンチナーメの他に、サン・ミゲリトールか、サン・カルロスか解らないけれど……そのリーダーになるという使命を引き受けることになるかも知れないんだ。

「ごらん、あなたはみごもり、ひとりの息子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい」。

私は言った。——《イエス》という名は昔は、一般に《救済者》とか《救済》と翻訳していたんだがね、今日では《解放者》とか《解放》というもつとよい言葉が使われている。ヘブライ語の名はイエシュア、意味は「ヤハウェ、解放し給う」とか、「ヤハウェは解放なり」ということなんだ。

誰かが言った。——この天使は、このことを告げる時には随分、破壊的なんだな。まるで、ニカラグアのソモサ家の奴らに誰かが、解放者の到来を知らせた時とそっくりだ。

他のひとりがそれに付け加えた。——マリアさまだって、この知らせを聞いたとたん、破壊的になっているわよ。マリアさまはその時、なんだか自分が地下運動に加わっているような気がしたんじゃないかと、私は思うわ。解放者の誕生というのは、秘密にされていなくてはならないんですもの。ひょっとしたら、そのことを知っているのは、マリアさまたちのほんとうに親しい友人たちだけ、それからご近所の二、三人の貧乏人たちだけだったかも知れないし、あるいはまた、この民衆のみんながそれを知っていたかも知れない。この人たちは当時、みんな、圧迫されてたんですから。イエスという名前からして、危険な名前だったんだわ。

他のもうひとり。——その名前が危険だってことは、今だって変わらないよ。俺たちがここで、この解放者やその解放について話し合うだけで、すでに俺たちは危険人物というわけだ。

それは偉大な方で、いと高きものの子と言われます。また、彼は、主なる神によって、父ダビデの王座を与えられるでしょう。彼は永遠にイスラエルの民の王となり、その国は終わることがないでしょう。

ウィリアムが言った。――聖書のなかでは、この最も高い者はつねに民族の解放者として現われる。まずモーセが、エジプトの王ファラオの腕からするりと逃げ出してしまふ時がそうだ。そしてそれから後は、彼は預言者たちを通して、絶えずあらゆる種類の迫害と闘う。彼の子イエス、この「ヤハウェは解放し給う」も、このいと高き者のようになるだろう。彼は王になるだろう。

オスカル 天使はキリストによって、新しい支配を告知したんですよ。それは貧しい者と謙遜なものの国なんだ。キリストが地上に現われて以来、この国が建設されている。だがまだ完全なものではない。

ドン・フリオ 私に言わせるなら、建設はまだ、ほとんど始まっていない。

そこでマリアは尋ねた。「私は男を知らないのですが、どうしてそんなことになるのですか？」

マルセリーノ それはあたかも俺たちが、ここソレンチナーメで次のように考えあぐねているのと同じようなものだ。仮に俺たちがまったく無学で、誰も大学へ行つたものがなく、多くの人が文盲で、あまりにも少数で、どんな手段も用いることができないとしたら、一体、俺たちに解放者はどのように出現して来るのだろうか、と。

天使は答えた。「聖霊があなたに下り、いと高き者の力の影があなたをおおいます」。

私は言った。——私たちにはもう、聖霊というのは神の霊であり、私たちがよく言うように、「神の流儀」あるいは神の「特性」、言い換えれば、愛であるということが解っているね。教会ではしばしば、この聖霊は「貧しき者たちの父」と呼ばれている。

若いフュリオ。——もしそれが愛の霊であると言うなら、それはまた、正義の霊でもありますね。社会的正義の霊、変革の霊、革命の霊でもあるわけです。この霊から、イエスは生まれたんですね。すると、助産婦としてそこに居合わせた若い人々を取りあげて来たナタリーエが。——イエスさまはマリアさまと愛との間にできた御子ですよ。

するとグローリアとアレフアンドロの母親であるオリヴィアが。——そうですとも、マリアさまは愛というか、愛の霊と結婚なさったんだわ。

私 私たちはみんな、この愛と結婚する資格があるんだよ。

マリアは言った。「私は主のはしためです。あなたが言われたとおりのことが、私の身に起こりますように」。そして天使は去った。

トマス これは、マリアさまが謙遜だったことの証明なんでしょうな。マリアさまは彼女に告げられたことを誇りに思う代わりに、自分自身を貧しく、取るに足らない人間だと感じていなさった。

ナターリエ　ここで私たちは、何にもましてマリアさまの従順さをお褒めしなくてはならないと、私は思うわ。そしてこれと同じように、私たちも従順になる準備をすべきなんだわ。なぜかと言うと、このような従順さというものは革命的なのよ。愛に対するこのような従順さというのは、ほんとうに革命的なことだわ。この従順さというのは、ほかのすべてのものに対しては不従順であれ、と私たちに命令するわけでしょう？